

現代におけるシュタイナー神秘主義の倫理的射程

—「道徳」と「Ich（自我）」の関係をめぐって—

西 井 美 穂

広島大学大学院総合科学研究科総合科学専攻

The Ethical Range of Rudolf Steiner's Mysticism in the Modern World: Exploring the Relation between “Morals” and “I (*Ich*)”

Miho NISHII

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract

The work of the Austrian philosopher Rudolf Steiner (1861—1925) influenced a number of fields in Germany in the nineteenth to twentieth centuries, including those of education, construction, agriculture, and medicine. His school of thought is known as anthroposophy (*Anthroposophie*), a term composed of the Greek words *anthrōpos* (human) and *sophia* (wisdom) and meaning study of the true essence of being human. Steiner perceived a crisis of his time as a “moral and mental (*moralisch-geistig*)” one, seeing man’s mind accelerating ever faster toward becoming materialistic and egoistic. Pursuing the recovery of morality, he presented anthroposophy to the world. Therefore, moral issues always underpin Steiner’s thoughts. However, many scholars of anthroposophy have focused only on his later mystical thoughts, outlined in his works *Theosophy* (*Theosophie*) and *An Outline of Occult Science* (*Die Geheimwissenschaft im Umriss*), and have been either for Steiner’s extraordinary cosmology or against it. In his later works, Steiner takes the role of a psychic or prophet able to predict human beings’ future for them. Scholars have tended to be somewhat indifferent to his early philosophical phase and consequently do not regard as important his early philosophical thoughts expressed in the *Philosophy of Freedom* (*Die Philosophie der Freiheit*). If they had not erected a wall between his early philosophical thoughts and his later mystical ones, they would have noticed the meaning of ethics that runs through his entire body of work, namely, the good relationships that exist among people of various backgrounds.

This paper aims, first of all, to establish the links between Steiner’s early and later thoughts on “morals” or “ethics”, and secondly to explore the meaning of these two concepts. I hold the view that his entire body of thinking is based on his early thoughts. In one of his early works, the

Philosophy of Freedom, we are introduced to an important concept, *Ethical Individualism* (*der ethische Individualismus*), which becomes a coherent undercurrent of all of Steiner's thoughts.

This paper is organized into 5 sections. Section I presents the historical background to Steiner's life and his life history. Section II examines the definition of mysticism generally and then Steiner's thoughts as seen from the perspective of mysticism. Section III discusses Steiner's epistemology, and Section IV examines Steiner's understanding of what constitutes being human. Section V explores the relation between "morals" and "ethics" in the context of Steiner's mysticism.

The most important section of this paper is Section V. We find that Steiner does not apply morality in a limited fashion to specific communities with specific cultural backgrounds. Rather, he tried to broaden the meaning of morals and ethics to human beings in general. Through being moral, human beings can overcome their egoist nature. Steiner focused on the good inside each and every individual, which gives human beings the ability to have a higher self. Every one of us has this self (*Ich*). The self has the ability to understand others; in other words, we can objectively see the self by expanding self-awareness.

Steiner regards Jesus, as Christ, to be the Sun-god who endows human beings with self and thus with the ability to have a higher self. Although criticized as a heretic by "orthodox" Christians for his interpretation of Christ, Steiner's thoughts have Western cultural roots, in Greek philosophy, like that of Plato and Aristoteles, and even more so in Greek mysticism. The main matter that we should examine then is what Steiner tried to present in his works. In our examination of his work, we see that the method he applies is to dig down to the very bottom of the "self (*Ich*)" to create the "all-self (*All-Ich*)" which extends to others. In other words, it addresses a problem related to self-reform—to overcoming egoism—by creating a container inside oneself that accepts others (including nature) as others. This method is clearly influenced by the Greek idea "know thyself".

In this paper we have found that Steiner's concepts of morals and ethics relate to understanding others through the self and overcoming egoism including the self. This is because Christ endowed human beings with the self and the ability to overcome the self. Through the self, we become capable of connecting to a divine world. Yet we know the divine entity is not the only god as in the context of Christianity: there are many divinities including Jesus Christ in the divine world.

The most controversial philosophical problem is how to live our lives without God after the *Death of God* in the context of Nietzsche. While Steiner's interpretation of Christ is not "orthodox", by making a higher self inside, we can connect with divine entities (God). In this way, we can live vigorously yet calmly in the modern world. Steiner's thinking tells us that "god" is still alive in a different fashion. But what is this god? I will address this question in future work.

はじめに

ルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861-1925) という現在、日本ではモンテソーリとならぶ幼児教育のブランドの一つとしてなじみ深い。このようにシュタイナーはシュタイナー教育の創設者として知られ、個性を尊重した自由教育を実践しているシュタイナー学校は、世界で毎年数十校増加し、2006年には921校となっている。しかし、このような増加傾向にある一方で、現実の大学入試制度や社会生活に適応することを目的とせず、自らの意志の自由を尊重するという独自性を貫くことを理念としているため、国家とのさまざまな制度的障害に直面し、どのように社会と折り合いをつけるかが課題となっている。

さて、シュタイナー研究であるが、日本においては教育実践が評価されている。1970年にシュタイナー教育が紹介されて以来、ブームとなり、幼児教育のブランドとして定着しているのが、その思想は敬遠されている。シュタイナーの思想は一般に人智学 (Anthroposophie) として知られ、ギリシア語の *anthrōpos* (人間) と *sophia* (叡智) を組み合わせたもので、人間が自らの叡智により、人間であることを見出す学であることを意味する。この人智学はドイツでは、思想が「霊学・精神科学 (Geisteswissenschaft)」という、見えないものをも実体として研究対象とする「科学」を基盤としているため、経験的実証的な科学からは「非科学的」と批判されている。日本においても、ドイツにおいても、シュタイナー思想の神秘主義的側面が問題となっているのである。しかし、評価の高いシュタイナーの実践活動の基盤となっているのは、この「霊学・精神科学」である。その思想を神秘主義の枠に閉じ込めるのではなく、また、思想と実践の乖離を解消する意味でも、新しい視座により分析する必要があると考えた。

新たな視座でシュタイナー思想を分析するために第一に取り組まなければならなかったのは、哲学的著作や神秘主義的著作、教育など実践的著作に通底しているものを探求し、シュタイナーの思索の方向性を把握することであった。しばしば代表作として取り上げられる『神智学 (Theosophie)』

を含め、これまでは研究の対象とされてこなかった初期の哲学的著作である『自由の哲学 (Die Philosophie der Freiheit)』や後期の実践的著作を分析し、シュタイナー思想全体に通底するのは何かと考察した時、『自由の哲学』の中で論じられている「倫理的個人主義 (der ethische Individualismus)」が鍵となる概念であることに気づいた。この言葉は、個としての人間が、自己を掘り下げることにより、理念の総計である直観が生まれ、それが個人の「道徳的内実」になるという意味をもつ。「道徳」的立場は個的なものであるが、同時に自己の基盤をしっかりと見据えることで、他者への理解、共同性へと向かうものであった。

本研究では、このようにシュタイナー思想を道徳論と見做し、現代におけるシュタイナー道徳論の深さと広がりを検証しつつ、その意義を考察することを目指した。

1. シュタイナー道徳論の分析と考察

このような初期の「倫理的個人主義」という概念を核としたシュタイナーの道徳論は、自己認識により獲得する内部に現れる「道徳的内実」が一人ひとりの個性の中では異なるものとして現れるというものであった。しかし同時に、その現れたものは、他者そのものを受容することのできる普遍性をもつとシュタイナーは考えた。自己認識を徹底的に行うことにより、他者理解への道が開かれるのである。自己認識により、人間は利己的存在でありながら、利己主義を克服する存在でもあるとの自覚が生まれる。その克服の契機を、キリストによって与えられるとシュタイナーはいう。「Ich (自我)」がキリストにより神性を呼び込むきっかけを与えられ、独立することで、人間は他者へと愛を広げていく。

しかし、シュタイナーの「道徳」は、他者へ愛を広げていくという善にのみ目が向いているのではない。利己主義そのものは善を包摂している悪であった。その利己の成長は、人間の中心である「Ich (自我)」が進化、成長していくことであり、自己の内から善から善をめざすのが人間であること

だとシュタイナーは考えた。利己的なものと、その利己を超克しようとするものの中で揺れ動く存在が人間であった。

このように、道徳論としてのシュタイナー思想を分析する中で、先行研究においては次のような課題が浮かび上がってきた。1. シュタイナーにおける「道徳」の意味、2. シュタイナー認識論の構造と認識と「道徳」の関係、3. 「Ich（自我）」の意味とシュタイナーの「道徳」との関係、4. シュタイナーの「道徳」とキリスト教の関係であった。こうした課題に対し、第一章から第五章では次のような議論を展開した。

第一章、「シュタイナーの生きた時代背景と生涯」では、シュタイナーの生涯を概観し、人間を一元的に捉え、認識を通して物質と精神を架橋する一元論に至ったシュタイナーの思想的背景を論じた。

第二章「神秘主義の中でのシュタイナーの位置づけ」では、近現代の思想家の神秘主義に対する主張を整理し、神秘主義の定義を考察した上で、「科学性」を重視し、ゲーテのいう「メタモルフォーゼ（変態）」する生命が人間存在の中心にあると考えているシュタイナーの神秘主義の議論を検証した。

第三章「シュタイナーの認識論」では、自己認識により主客の合一をすることで、自らの思考を客観的にみる自己を醸成するという認識的一元論（Monismus）を検討した。一元論は、シュタイナーがゲーテの自然認識の方法を学ぶことで構築した理論である。人間における一元論は、ゲーテのように多が一になる特殊から普遍への変容ではなく、多はそのまま多であり、特殊を入口として普遍に到達するが、その普遍は一なるものではなく、個として存在するものであることを明らかにした。

第四章「シュタイナーの人間論」では、シュタイナーの人間論が、古代ギリシアのダイモンの人間観、アリストテレスの魂論、神智学に依拠していることを論じ、シュタイナーの理論において、人間が「Leib（体）」、「Seele（魂・心性）」、「Geist（霊・精神）」を持ち、「Seele」を中心に、物質の世界に属する「Leib」と人間を超えた聖なる世界

の「Geist」が有機的な関係を持ち統合されるという議論を明らかにした。また、「Seele」の核「Ich（自我）」は人間を存立させている要素であり、「Ich」が神化されることで人間は「道徳的人間」になるという議論を紹介した。

第五章「シュタイナー神秘主義における『道徳（Moral・Sittlichkeit）』」では、初期の思想で提示された「倫理的個人主義」という概念を検証し、その立場から出発した道徳論は、中期の思想で、「道徳」が「愛」と結びつけられ、キリストと関連づけられ、後期の思想では、こうした理論を基に、「道徳」を獲得するために「新しい感覚」を開くことで主体的に「道徳」の方向を選択する人間を育成する理論へと繋がる思想の流れを論じた。

シュタイナーの「道徳」は、人間を物質と精神を架橋しようとする認識的一元論を経て、内的に獲得されるものであることが明らかとなった。しかし、その「道徳」は、善悪の区別がない。シュタイナーは、人間を超えた次元から人間を論じ、物体としての人間は、利己主義であるが、精神的部分をもつ人間は利己主義を乗り越えようとする存在であることを示した。人間が利己主義を乗り越える時に、「道徳」の模範者であるキリストが必要となる。「Ich（自我）」の独立がキリストによって与えられたとするのは、「Ich（自我）」の独立により、それまでの血縁、地縁中心にしか及ばなかった「愛」が人間一般への「愛」へ広がるというシュタイナー独自の聖書解釈に基づくものであった。「Ich」の独立は、より広い「愛」へと人間が向かうための必要条件であった。

シュタイナーの道徳論は、認識を通して、人間は一元的に統一され、その結果として、人間は神化されるという構造をもっていた。

2. 人間であること —「Ich（自我）」と「利己主義の克服」 を内にもつ「道徳的人間」—

「倫理的個人主義」という個性を重視した「道徳」の立場に立つシュタイナーは、晩年、「利己主義の克服」を目指し、他者と協働することの大切さ

を強調するようになる。自己の神性を意識し、理念界と繋がる理想の自己を追求するのみでは、他者と協働できず不幸な結果になるとし、1923年のクリスマス会議で「普遍的人智学協会 (Allgemeine Anthroposophische Gesellschaft)」を設立させた。理想にむけて邁進する、思考が強化された「Ich」をもつ個人の集まりでは、個の主張が強くなり、協働することに到達できないという現実の問題に直面した結果の「普遍的人智学協会」の設立であった。独立した「Ich」を持ち、他者を他者と認め、協働しあうことのむずかしさをシュタイナーは痛感していた。

人間は利己主義を本性とし、それを克服することが「道德的精神的」に生きることだという、人間にとっての理想の方向を描いてみせたのが人智

学であった。シュタイナーが晩年に訴えた共生の精神を包摂した「人間の進化」を軸とする道德論に、現代を生きる我々はどのような意義を見いだせるのか。

「Ich」は個体としての人間を存立させているものであり、捨て去ることはできない。「Ich」を消滅させず、協働するということを人智学は課題としていたが、個我としての「Ich」を消滅させないが故に、その協働性も危ぶまれる。しかし、こうした、「Ich（自我）」を抱えつつ「利己主義の克服」をめざし生きることこそが、人間が人間として生きることの意味ではなかろうか。今後の課題は、こうしたシュタイナーの倫理性を、キリスト教との関連で考究していきたい。